

韓国における肢体不自由児をもつ母親の 発達期待に関する研究

朴 華 文* 中 司 利 一

本研究は韓国における、肢体不自由児に対する母親の発達期待の特徴を調べ、日本のそれとの比較の上、その特徴を考察することを目的としたものである。調査対象は韓国と日本の肢体不自由養護学校在学中の児童・生徒の母親（韓国24名、日本23名）である。調査方法は、発達期待を数量的に測定し操作的に把握するためにQ-技法を用いた。Q-技法では児童・生徒の発達期待に関する60項目の質問が使用された。その結果から次のことが示唆された。日本側の肢体不自由児の母親が小学部において「人生の幸せ」を期待しているのに対して、韓国側は「身辺生活能力の発達」を期待していた。また、高等部では、日本側が「人生の幸せと自立への能力発揮」を期待しているのに対し、韓国側も同様に「人生の幸せと自立への能力」発揮を期待している。一方、障害の程度によって分析すると、軽度と重度の肢体不自由児の発達期待は日本側が軽度の場合「職業的自立と一般学校での高等教育」を期待しており、韓国側は「職業的自立と特技・残存能力の発達」を期待していることがわかった。重度の場合には、日本側が「人生の幸せと身辺生活能力の発達」を期待しているのに対して、韓国側は「障害を克服する強い精神力」を期待している傾向がみられた。

キーワード：肢体不自由児 発達期待 Q-技法 Qモード因子分析

I. 問題及び目的

発達期待に関する研究は、韓国の肢体不自由児教育の発展と改善のために必要な多くの課題中で、障害児童を囲んでいる環境的要因の一つとしてとりわけ重要であると考えられる。なぜなら、児童に対するかかわりをもつ人々の、児童への発達期待の現状把握は、教育の質的向上にとって重要であるからである。これまでの研究で、発達期待は子どもにかかわりをもつ人々の子どもの教育に関する動機づけと内容に関係し、この期待によって子どもへの接し方も変わるし、教育効果も変化することが指摘されている（塩田、1955；津川、1974；柏木、1977；飯島、1983）からである。

井上（1977、1979）は、「子どもの発達に対する期待あるいは信頼は教育の出発点であるし、そのような期待あるいは信頼がなければ教育は成り立

たない、そして発達に対する期待は普通の親を含めて教育に関与するものの共通項である」と指摘している。

ここで子どもへの発達期待とは、親または教師が子どもにかけている発達面での期待のことである。この発達期待は、主に子どもへの能力、人格、社会性、そして将来などの領域で構成されており、各々の領域はまた、下位領域別に細分することができる。

発達期待が教育に及ぼす影響の大きさについては障害児の場合にもまったくあてはまり、障害児へのこれらの期待が高すぎたために子どもの発達を歪めたという場合もあるし、また可能な期待をはじめからあきらめて発達を促す手だてを考えず働きかけを怠っていることも時にはある。そして個々の子どもたちに対する適切かつ積極的な期待が子どもを変える大人がわの動機づけともなり、それを受けて子どもひとりひとりが最大限の発達をとげるに至るという点で、子どもへの期待は、

* 心身障害学研究科

障害児教育においても重視すべき問題であると考えられる。これまでも、障害児において、子どもへの発達期待は障害をとりまく環境の要因として障害児の発達に重大な影響を及ぼすことが実証されている (Jensen, 1962; Kogan, 1970; 伊藤, 1972; 藤田, 1976; 中谷, 1978)。

しかし、これまでの研究はいずれも発達期待の内容が面的であり、そのうえ大部分の研究が障害幼児を対象にしており、学齢期以上の子どもへ関連づけて検討した研究は見あたらない。

そこで本研究では、これまでの先行研究などを参考にして、肢体不自由児養護学校で就学中の子どもを持つ韓国の母親が自分の子どもに対して、どのような発達期待を持っているかを日本との比較の上で明らかにしようとするものである。

II. 研究方法

1. Q一分類の項目作成

(1)予備調査

①被験者

本項目作成のために実施された予備調査の被験者は Table 1. の通りである。

②調査方法及び結果の処理

発達期待に関して収集された250項目を予備調査項目決定のために心身障害学系教官及び博士課程、修士課程院生10名に発達期待の項目として妥当か否かの判断を依頼し、6名以上が妥当であるとした72項目を予備調査項目と決定した。この72項目について被験者が各領域別の項目中に最も重要だと思われる項目から1, 2, 3, 4, …に順位づけを行った。その結果の分析は、筑波大学学術情報処理センターのSPSSを用い、SPSSのプログラムの中から「FREQUENCY」を用いた。予備調査項目(72項目)のうち「FREQUENCY」の分析結果から度数分析で正規分析に近づいている49項目を選び出した。

③本調査のQカード項目作成

予備調査から得られた、49項目に基づいて、さらに各領域の参考文献を参考にして、70項目を選定し、項目の妥当性を検討するために専門的知識を有する人10名に各領域別の分類を依頼し一致度70%以上のものを取りあげ本調査の60項目を決定した。(Table 3参照)

Q一項目の構造化は次の4つの領域で分類されており、さらに下位領域別に分類された。①能力

Table 1 予備調査者

障 害	肢体不自由		精神薄弱		一般	計
	母 親	教 師	母 親	教 師	女子大生	
対 象	24	44	25	32	36	161

に関する領域(生活習慣, 運動機能, 健康・安全, 理解・言語, 学習・知的・創意)項目1—29。②人格に関する領域(性格, 情緒)項目30—39。③社会性に関する領域(対人関係, 社会的技能)項目40—49。④将来に関する領域(進学・選職・肯定的価値)項目50—60。

(2)本 調 査

①被 験 者

調査対象は、韓国は3か所の肢体不自由養護学校、日本でも3か所の肢体不自由養護学校児童・生徒の母親に実施された。

本調査の被験者は Table 2の通りである。

②調査方法

調査項目(60項目)をカードに記入し、これをQ一分類させるため分類盤を用意し、刺激文に提示されているような肢体不自由児に対して、自分の気持ちに最もあてはまる極から最もあてはまらない極まで、正規分布をなすように9段階に強制分類させた。

③結果の処理

実施されたQ一分類の結果を、筑波大学学術情報処理センター-FACOM-MのSPSS統計パッケージを利用して「Qモード因子分析」を行なった。因子分析は、バリマックス法によって回転させ、第2因子まで抽出した。次いで抽出された各群の因子毎に清水・斉藤(1976)の手続きを参考にして因子列を作成した。

III. 結果と考察

まず、肢体不自由養護学校で就学中の児童・生徒に対して、韓国一母親群と日本一母親群の発達期待を概観し、その全体的傾向を把握するため、各項目の平均得点によるt検定を行なった。そして各群のQ一分類の結果をQモード因子分析し、得られたそれぞれの因子列を作成して因子解釈を行なった。

1. 肢体不自由児に対しての韓国一母親群と日

Table 2 被験者の内分け (人)

学 年	障害程度	韓 国	日 本
小学部の母親	軽 度	5	6
	重 度	6	6
高等部の母親	軽 度	5	7
	重 度	7	5
計 (名)		23	24
平均年齢		39.2(歳)	40.4(歳)

本一母親群の発達期待の全体的傾向

両群の発達期待の全体的傾向は Table 3 に示す通りである。

(1) 韓国一母親群と日本一母親群が共通に持っている発達期待

韓国一母親群と日本一母親群の両群ともに、平均点 6 点以上の高い発達期待を示すものは、「積極的にやろうとする意志をもつようになってほしい」(No 30)、「物事に対してねばり強く耐えられるようになってほしい」(No 31)、「何か一つでもよいから特技を持っている子になってほしい」(No 53)、「自分のもてる能力を発揮してほしい」(No 57)、「幸せに生きてほしい」(No 59)、である。

逆に、両群ともに、平均点 4 点以下の低い発達期待を示すものは、「“野菜” “果物” “動物” などの名前がわかるようになってほしい」(No 22)、「人見知りをしなくてほしい」(No 43)、「特殊学級へ行かせたい」(No 54) である。

これらの項目からみると、韓国一母親群と日本一母親群の母親が子どもに期待しているのは、性格の面で積極的意志とねばり強く耐えられる精神、そして将来への期待で何か一つでもよいから特技を持って自分の能力発揮ができる子になってほしいという自立への期待がみられており、そのうえ子どもの幸せを望んでいることがわかる。

また、期待を示していないものには、「野菜” “果物” “動物” などの名前の理解と人見知りに関する項目であった。これらは就学前幼児の段階での問題で就学後の児童には期待していないためと考え

られる。そして特殊学級へ行かせたいという期待が低いのは特殊学級より一般学校での教育を望んでいるためであろう。

(2) 韓国一母親群と日本一母親群が差のみられる発達期待

各項目にみて、母親の発達に関する期待で、韓国一母親群と日本一母親群で明確な差がみられるのは、理解面での「相手の言うことを理解できるようになってほしい」(No 23)、という項目で日本一母親群のほうが強く期待しているし、知的面での「手紙が書けるようになってほしい」(No 25)の項目では、韓国一母親群の方が大きく期待している。また、創意面での「模倣だけでなく自分で創意工夫することができるようになってほしい」(No 28)の項目も韓国一母親群の方が強く期待している。

性格面での「人に頼らずに自分で物事を処理できるようになってほしい」(No 33)の項目は、日本一母親群の方が高く、情緒面での「かわいそうだと思う心をもつ子どもになってほしい」(No 39)の項目は日本一母親群に比べて韓国一母親群が非常に低い平均点をみせていることである。

また、社会的技能面で「集団で自分の意志で行動できるようになってほしい」(No 47)、そして選職面の「職業の訓練をする施設で指導を受けさせたい」(No 52)の項目で韓国一母親群の期待が大きい。

これらの項目からみると、日本一母親群は子どもに対して、言語の理解力と自分で物事が処理できる能力、すなわち、生活自立能力の発達を期待しており、韓国一母親群は子どもに対して、手紙が書けることと自分で創意工夫ができるような知的能力を期待している。そして集団中で自分の意志で行動できることと職業の訓練を受けて職業人として自立への強い期待がかけられている。これらのことから考えると韓国一母親群の母親は子どもの能力面の正しい理解よりも、将来への不安・心配などのことで知的能力の発達と職業的自立への期待が大きいと思われる。

2. 小学部と高等部の肢体不自由児をもつ母親の発達期待の因子分析

まず、因子の抽出で、累積比率 90% で因子分析を行ない、その結果 2 つの因子が抽出された。小学部と高等部の肢体不自由児をもつ、韓国一母親群と日本一母親群ともに第 1 因子の固有値と寄与

Table 3 各項目別平均の差の検定

No.	項目	韓国一母親群		日本一母親群		t-test tp
		Mean	S.D	Mean	S.D	
1	自分で食べられるようになってほしい。	4.41	2.41	5.21	2.86	-1.04
2	自分で洗顔ができるようになってほしい。	4.29	2.21	3.86	2.13	0.66
3	自分で衣服の着脱ができるようになってほしい。	4.41	2.56	5.17	2.36	-1.05
4	一定の生活のリズムに合わせた生活ができるようになってほしい。	5.20	1.86	4.91	1.47	0.60
5	家事の手伝いができるようになってほしい。	4.50	1.50	4.43	1.97	0.13
6	自分で買い物ができるようになってほしい。	4.33	2.05	5.00	2.25	-1.06
7	ひとりでおすわりをしてほしい。	3.62	2.01	4.30	2.38	-1.06
8	走れることができるようになってほしい。	4.12	2.49	4.00	2.29	0.18
9	ひとりで歩けるようになってほしい。	5.20	2.39	5.52	2.69	-0.42
10	はさみで丸や四角を切り抜けるようになってほしい。	4.79	1.97	4.26	1.45	1.04
11	ボール投げができるようになってほしい。	4.12	1.70	3.86	1.39	0.56
12	養護学校で体育の授業について行けるようになってほしい。	4.79	1.56	4.69	1.89	0.19
13	けがをしったり体の異常なときは訴えられるようになってほしい。	4.37	1.71	5.21	2.27	-1.44
14	安全に気をつけて遊具や道具を使えるようになってほしい。	4.54	1.56	4.52	1.53	0.04
15	健康診断、予防接種、病气やけがの治療をいやがらずに受けるようになってほしい。	3.91	1.53	4.17	1.74	-0.54
16	車に気をつけながら道路を歩けるようになってほしい。	4.45	1.64	5.17	1.99	-1.35
17	自分で健康管理ができるようになってほしい。	5.41	1.21	5.82	1.61	-0.99
18	ゆっくりでもいいからしっかりと発音ができるようになってほしい。	5.66	2.25	4.91	2.69	1.04
19	学校での出来事を親に話せるようになってほしい。	4.50	2.00	5.34	1.33	-1.70
20	自分の欲しいものが言えるようになってほしい。	4.33	1.49	4.86	2.22	-0.97
21	「……を持ってらっしゃい」などの簡単な命を理	4.50	2.04	3.69	1.71	1.46
22	解して実行してほしい。	3.62	2.26	3.95	1.98	-0.53
23	「野菜」「果物」「動物」などの名前がわかるように	4.58	1.55	5.78	1.90	-2.37*
24	相手の言うことを理解できるようにしてほしい。	4.37	2.16	4.39	1.67	-0.03
25	数学や文字が読めるようになってほしい。	5.37	2.14	4.04	1.52	2.45*
26	手紙が書けるようになってほしい。	5.33	1.90	4.95	2.01	0.66
27	日常生活にさしかえない程度の計算ができるように	5.04	1.57	4.56	1.70	1.00
28	養護学校での授業を理解できるようにしてほしい。	5.54	1.25	4.26	1.51	3.17**
29	模写だけでなく自分で創意工夫することができるよ	5.33	2.39	4.86	1.84	0.74
30	めずらしい事について質問したり調べたりするよ	6.25	1.80	6.47	1.47	-0.47
	積極的にやるうとすする意志をもつようになってほ					
	しい。					

*** : p<0.001, ** : p<0.01, * : p<0.05

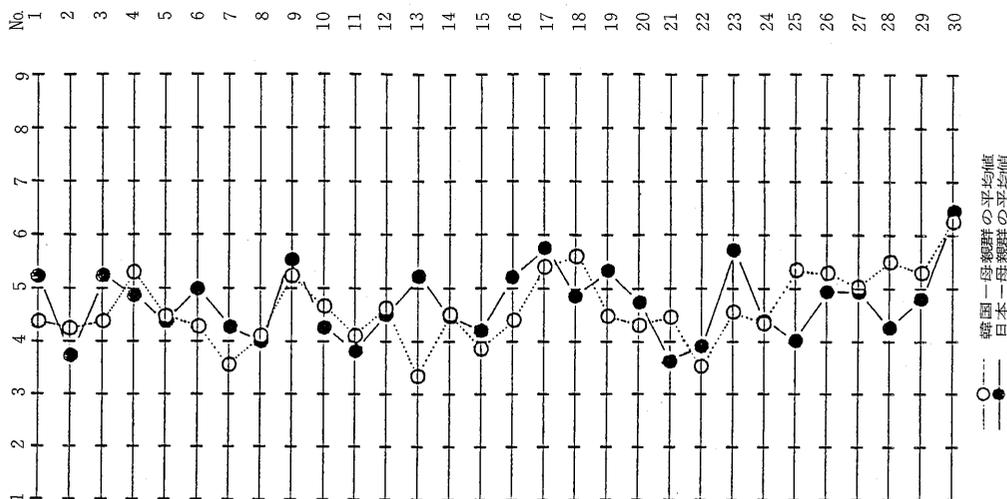
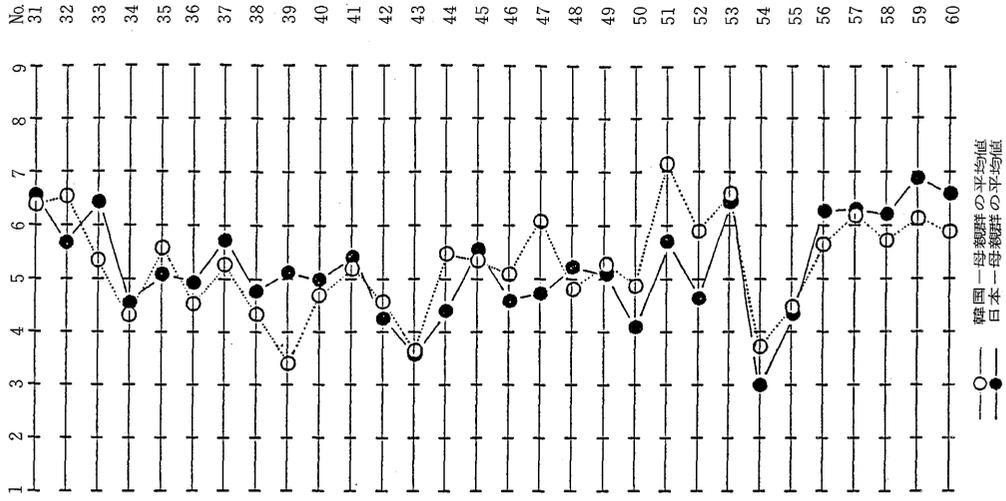


Table 3 各項目別平均の差の検定

No.	項目	韓国一母親群		日本一母親群		t-test tp
		Mean	S D	Mean	S D	
31	物事に対してねばり強く耐えられるようになってほしい。	6.41	2.20	6.60	1.92	-0.32
32	物事に対してじっくり考えてから判断できるようにしてほしい。	6.58	1.95	5.78	1.80	1.46
33	人に頼らずに自分で物事を処理できるようにしてほしい。	5.37	1.83	6.47	1.75	-2.10*
34	何事もすばやくとりかかろうようになってほしい。	4.25	1.67	4.56	1.80	-0.62
35	落ちついて行動ができるようになってほしい。	5.58	1.24	5.08	1.64	1.17
36	喜怒哀楽をその子なりに表現できるようにしてほしい。	4.54	1.50	4.95	2.07	-0.79
37	自分の感情をコントロールできるようにしてほしい。	5.20	2.04	5.82	1.89	-1.07
38	花を見て「美しい」と思う心をもつ子どもになってほしい。	4.29	2.01	4.86	1.71	-1.06
39	かわいそうだと思う心をもつ子どもになってほしい。	3.41	1.55	5.08	1.64	-3.57***
40	友だちと遊べるようになってほしい。	4.87	0.97	5.00	1.56	-0.33
41	学校の友だちと仲良くしてほしい。	5.12	1.56	5.43	1.72	-0.64
42	兄弟と順番に物をつかうようになってほしい。	4.66	1.40	4.26	1.21	1.06
43	人見知りをしないしてほしい。	3.79	2.34	3.73	1.83	0.09
44	家族のみんなとほほ適切に交流ができるようになってほしい。	5.50	1.74	4.43	1.99	1.95
45	集団生活ができるようになってほしい。	5.37	2.16	5.60	1.58	-0.42
46	集団でルールに従ってゲームができるようになってほしい。	5.04	2.01	4.73	1.21	0.62
47	集団で自分の意志で行動できるようにしてほしい。	6.04	1.89	4.86	1.57	2.30*
48	きまりを守るようになってほしい。	4.91	1.41	5.13	1.29	-0.54
49	社会的なできごとや行事について関心をもつようになってほしい。	5.16	1.73	5.04	2.07	0.22
50	一般学校で高等教育を受けさせたい。	4.91	2.84	4.08	2.61	1.04
51	職業を持って自立してほしい。	7.08	2.46	5.73	2.41	1.89
52	職業の訓練をする施設で指導を受けさせたい。	5.91	2.08	4.69	2.05	2.02*
53	何か一つでもよいから特長を持っている子になってほしい。	6.66	1.37	6.52	2.15	0.28
54	特殊学級へ行かせたい。	3.79	2.30	3.00	1.73	1.33
55	普通学級へ行かせたい。	4.45	2.26	4.30	2.40	0.23
56	喜びの日々を送ってほしい。	5.70	1.04	6.21	1.78	-1.20
57	自分のもてる能力を発揮してほしい。	6.12	1.98	6.26	2.09	-0.23
58	何か一つでもよいから社会に役立つ子になってほしい。	5.79	2.14	6.13	1.91	-0.57
59	幸せに生きてほしい。	6.08	2.28	6.91	1.75	-1.39
60	いきがいをもちて生きる子になってほしい。	5.91	2.22	6.65	1.84	-1.23

*** : p < 0.001, ** : p < 0.01, * : p < 0.05



率が高く、韓国一母親群の小学部では固有値10.52、寄与率87.76%、高等部では固有値10.81、寄与率90.11%であった。また、日本一母親群の小学部では固有値9.69、寄与率88.10%、高等部では固有値10.69、寄与率89.15%であった。

第2因子の固有値、寄与率は両群ともに極めて低い値を示した。従って、第1因子によって両群の特徴の大部分が説明されていることがわかる。

次に清水(1976)の手続きに従って両群別、各因子別の因子列を作成した。以下、小学部と高等部の肢体不自由児の韓国一母親群と日本一母親群における各因子列の解釈を行なった。

(1)小学部の肢体不自由児に対する韓国一母親群の発達期待の因子分析

小学部の肢体不自由の発達期待についての韓国一母親群の第1因子はTable 4の通りであった。

次に各因子について解釈を加える。

小学部の肢体不自由児に対する韓国一母親群の第1因子で特徴をもっともよく示している項目には、+4の項目で、生活習慣面の「自分で洗顔ができるようになってほしい」、言語面の「ゆっくりでもいいからしっかりと発音ができるようになってほしい」、運動機能面の「はさみで丸や四角を切り抜けるようになってほしい」3項目があり、+3の項目で、生活習慣面の「自分で衣服の着脱ができるようになってほしい」などの能力への期待項目が2つ、性格面の「物事に対してねばり強く耐えられるようになってほしい」などの人格への期待項目が2つ、選職面の「職業を持って自立してほしい」の将来への期待項目が1つなどの5項目があった。これらの項目は「洗顔自立」「意志表現」「粗大運動」「忍耐力」「積極性」などを意味するものであった。

逆に特徴を示していない項目には、進学面の「一般学校で高等教育を受けさせたい」「特殊学級へ行かせたい」「普通学級へ行かせたい」、対人関係面の「人見知りをしないでほしい」、社会的技能面の「集団でルールに従ってゲームができるようになってほしい」、健康面の「健康診断、予防接種、病気やけがの治療をいやがらずに受けるようになってほしい」、情緒面の「かわいそうだと思う心をもつ子になってほしい」、理解面の「野菜」「果物」「動物」などの名前がわかるようになってほしいなどの8項目があった。これらの項目は、将来と社会性に関した項目である。

以上の結果から、第1因子は、日常生活能力に關した因子であって「身近生活能力の発達」を求める因子と名づけることができよう。そして韓国一母親群が小学部の肢体不自由児に対して持っている発達期待は主として身近生活能力の発達因子によって構成されているといえる。このことから、韓国一母親群は小学部の肢体不自由児に対して、主として身近生活能力の発達に關する期待をしていることがわかる。

(2)小学部の肢体不自由児に対する日本一母親群の発達期待の因子分析

小学部の肢体不自由児に対する日本一母親群の発達期待の第1因子はTable 5に示した通りである。

日本一母親群が小学部の肢体不自由児に対する発達期待で特徴を最もよく示している項目には、+4の項目で、肯定的価値面の「幸せに生きてほしい」、理解面の「相手の言うことを理解できるようになってほしい」、生活習慣面の「自分で食べられるようになってほしい」などの3項目があり、+3の項目で、健康面の「けがをしったり体の異常なときは訴えられるようになってほしい」の能力への期待項目が2つ、肯定的価値面の「喜びの日々を送ってほしい」などの将来への期待項目が2つ、社会的技能面の「集団生活ができるようになってほしい」の社会性への期待項目が1つなどの5項目があった。これらの項目は「幸せ」「意思理解」「喜びの日々」「いきがい」「集団参加」などを意味するものであった。

逆に特徴を示していない項目には、進学面の「一般学校で高等教育を受けさせたい」「特殊学級へ行かせたい」「普通学級へ行かせたい」、生活習慣面の「自分で買い物ができるようになってほしい」、知的・創意面の「手紙が書けるようになってほしい」「日常生活にさしつかえない程度の計算ができるようになってほしい」「めづらしい事について質問したり調べたりするようになってほしい」などの8項目があった。

以上の結果から、第1因子は幸せな生活に關した因子であって「人生の幸せ」を求める因子と名づけることができよう。そして日本一母親群が小学部の肢体不自由児に持っている発達期待は主に人生の幸せに關する発達因子によって構成されているといえる。従って、このことは日本一母親群が小学部肢体不自由児に対して、主として人生の

幸せを期待していることを意味している。

(3) 高等部の肢体不自由児に対する韓国一母親群の発達期待の因子分析

高等部の肢体不自由児の発達期待についての韓国一母親群の第1因子は Table 6の通りであった。

特徴をもっともよく示している項目には、+4の項目で肯定的価値面の「幸せに生きてほしい」、 「いきがいをかって生きる子になってほしい」、言語面の「ゆっくりでもいいからしっかりと発音ができるようになってほしい」などの3項目があり、+3の項目で肯定的価値面の「自分のもてる能力を発揮してほしい」「何か一つでもよいから社会に役立つ子になってほしい」などの将来への期待項目が3つ、性格面の「積極的にやろうとする意志をもつようになってほしい」「物事に対してねばり強く耐えられるようになってほしい」の人格への期待項目が2つなどの5項目があった。これらの項目は「幸せ」「いきがい」「意思表現」「能力発揮」「社会に役立つ子」「職業自立」「積極性」などを意味するものであった。

逆に特徴を示していない項目に、理解面の「野菜」「果物」「動物」などの名前がわかるようになってほしい、「…をかっていらっしやいななどの簡単な命令を理解して実行してほしい」、言語面の「学校での出来事を親に話せるようになってほしい」、対人関係面の「人見知りをしなくてほしい」、情緒面の「喜怒哀楽をその子なりに表現できるようになってほしい」、学習・創意面の「養護学校での授業を理解できるようになってほしい」「めずらしい事について質問したり調べたりするようになってほしい」、健康面の「けがをしたり体の異常なときは訴えられるようになってほしい」など能力に関係した8項目があった。

以上の結果から、第1因子は幸せといきがいをかって社会的自立に関した因子であって「人生の幸せと自立への能力発揮」を求める因子と名づけることができよう。そして韓国一母親群が高等部の肢体不自由児に対して持っている発達期待は主として人生の幸せと自立への能力発揮の発達因子によって構成されているといえる。従ってこのことは、韓国一母親群は高等部の肢体不自由児に対して主として人生の幸せと自立への能力発揮の発達に関する発達期待をしていることを物語っている。

(4) 高等部の肢体不自由児に対する日本一母親群

の発達期待の因子分析

日本一母親群が高等部の肢体不自由児に対して持っている発達期待は Table 7の通りであった。

特徴をもっともよく示している+4の項目には、肯定的価値面の「幸せに生きてほしい」、 「いきがいをかって生きる子になってほしい」、選職面の「職業の訓練をする施設で指導を受けさせたい」の3項目があり、+3の項目に健康面の「自分で健康管理ができるようになってほしい」の能力への期待項目が一つ、肯定的価値面の「何か一つでもよいから特技を持っている子になってほしい」などの将来への期待項目が2つ、性格面の「積極的にやろうとする意志をもつようになってほしい」などの人格への期待項目が2つなど5項目があった。これらの項目は「幸せ」「いきがい」「職業訓練」「特技」「能力発揮」「積極性」「忍耐力」などを意味するものであった。

逆に特徴を示していない項目には、言語・理解面の「ゆっくりでもいいからしっかりと発音ができるようになってほしい」「野菜」「果物」「動物」などの名前がわかるようになってほしい、生活習慣面の「自分で洗顔ができるようになってほしい」「自分で食べられるようになってほしい」「自分で衣服の着脱ができるようになってほしい」、知的面の「数字や文字が読めるようになってほしい」、運動機能面の「ひとりでおすわりをしてほしい」、などの8項目があった。これらの項目は身近生活に関した項目である。

以上の結果から第1因子は幸せと自分の能力発揮に関した因子であって「人生の幸せと自立への能力発揮」を求める因子と名づけることができよう。従ってこれらのことから、肢体不自由児の日本一母親群が高等部の肢体不自由児に対して韓国一母親群と同様に人生の幸せと自立への能力発揮に関する期待をしていることがわかる。

3. 障害が軽度と重度な肢体不自由児をもつ母親の発達期待の因子分析

(1) 障害が軽度な肢体不自由児に対する韓国一母親群の発達期待の因子分析

障害が軽度な肢体不自由児についての韓国一母親群の第1因子は Table 8. で示した通りであった。

障害が軽度な肢体不自由児に対する韓国一母親群の第1因子で特徴をもっともよく示している項目には、+4の項目に選職面の「職業をかって自立

してほしい]、肯定的価値面の「いきがいを持って生きる子になってほしい」「何か一つでもよいから社会に役立つ子になってほしい」など3項目があり、+3の項目に肯定的価値面の「幸せに生きてほしい」「自分のもてる能力を発揮してほしい」などの将来への期待項目が3つ、社会的技能面の「集団で自分の意志で行動できるようになってほしい」の社会性への期待項目が1つ、性格面の「物事に対してねばり強く耐えられるようになってほしい」の人格への期待項目が1つなどの5項目があった。これらの項目は「職業自立」「いきがい」「特技」「残存能力発揮」などを意味するものであった。

逆に特徴を示していない項目には、生活習慣面の「自分で衣服の着脱ができるようになってほしい」「自分で洗顔ができるようになってほしい」「自分で食べられるようになってほしい」、運動機能面の「ひとりでおすわりをしてほしい」、理解面の「野菜」「果物」「動物」などの名前がわかるようになってほしい、「…を持っていらっしゃいなどの簡単な命令を理解して実行してほしい」、進学面の「特殊学級へ行かせたい」、健康面の「けがをしったり体の異常なときは訴えられるようになってほしい」などの8項目があった。これらの項目は身近生活に関した項目である。

以上の結果から、第1因子は職業的自立と特技・残存能力に関した因子であって「職業的自立と特技・残存能力」を求める因子と名づけることができよう。そして韓国一母親群が軽度な障害を持つ肢体不自由児に対して、主として職業的自立と特技・残存能力の発達因子によって構成されているといえる。従って軽度な肢体不自由児に対して、韓国一母親群は職業的自立と特技・残存能力に関する期待をしていることがわかる。

(2)障害が軽度な肢体不自由児に対する日本一母親群の発達期待の因子分析

Table 9.は、日本一母親群が軽度な肢体不自由児の発達期待に対する第1因子であった。

特徴をもっともよく示している項目には、+4の項目に選職面の「職業をもって自立してほしい」、肯定的価値面の「何か一つでもよいから社会に役立つ子になってほしい」、性格面の「物事に対してねばり強く耐えられるようになってほしい」3項目があり、+3の項目に進学面の「一般学校で高等教育を受けさせたい」「普通学級へ行かせた

い」などの将来への期待項目が3つ、性格面の「人に頼らずに自分で物事を処理できるようになってほしい」の人格への期待項目が1つなどの5項目があった。これらの項目は「職業自立」「社会に役立つ子」「一般教育」「普通学級」「能力発揮」「自立心」などを意味するものであった。

逆に特徴を示していない項目には、運動機能面の「ひとりでおすわりをしてほしい」、理解・言語面の「…を持っていらっしゃいなどの簡単な命令を理解して実行してほしい」「自分の欲しいものが言えるようになってほしい」、進学面の「特殊学級へ行かせたい」、対人関係面の「人見知りをしなくてほしい」「家族のみんなとほほ適切に交流ができるようになってほしい」などの8項目があった。これらの項目は身近生活能力に関した項目であった。

以上の結果から、第1因子は職業的自立と一般学校での高等教育に関した因子であって「職業的自立と一般学校での教育」を求める因子と名づけることができよう。そして日本一母親群が障害の軽度な肢体不自由児に対する発達期待は、主として職業的自立と一般学校での教育の因子によって構成されているといえる。従ってこのことは、日本一母親群が軽度の肢体不自由児に対して職業的自立と一般学校での教育に関する期待をしていることを意味している。

(3)障害が重度な肢体不自由児に対する韓国一母親群の発達期待の因子分析

韓国一母親群が障害の重度な肢体不自由児に持っている発達期待は Table 10で示す通りであった。

特徴を最もよく示している項目には、+4の項目に性格面の「物事に対してねばり強く耐えられるようになってほしい」、肯定的価値面の「幸せに生きてほしい」「自分のもてる能力を発揮してほしい」3項目があり、+3の項目に性格面の「積極的にやろうとする意志をもつようになってほしい」の人格への期待項目が1つ、「何か一つでもよいから社会に役立つ子になってほしい」「職業をもって自立してほしい」などの将来への期待項目4つがあった。これらの項目は「忍耐力」「残存能力発揮」「積極性」「社会に役立つ子」などの意味をもつものであった。

逆に特徴を示していない項目には、理解面の「野菜」「果物」「動物」などの名前がわかるようになって

てほしい、対人関係面の「人見知りをしないでほしい」「兄弟と順番に物を使うようになってほしい」、運動機能面の「走れることができるようになってほしい」、情緒面の「喜怒哀楽をその子なりに表現できるようになってほしい」「かわいそうだと思う心をもつ子どもになってほしい」、知的・学習面の「養護学校での授業を理解できるようになってほしい」「日常生活にさしつかえない程度の計算ができるようになってほしい」などの8項目であった。これらの項目は人格と知的能力に関した項目であった。

以上の結果から、第1因子は社会的自立への強い精神力に関した因子であって「自立への強い精神力」を求める因子と名づけることができよう。そして韓国一母親群は重度な障害を持つ肢体不自由児に対して、主として自立への強い精神力に関する発達因子によって構成されているといえる。このことから韓国一母親群は重度な肢体不自由児に対して、主として障害の克服への強い精神力に関する期待をしていることを意味している。

(4)障害が重度な肢体不自由児に対する日本一母親群の発達期待の因子分析

Table 10は日本一母親群が重度な肢体不自由児の発達期待に対する第1因子であった。

特徴を最もよく示している項目には、+4の項目に肯定的価値面の「幸せに生きてほしい」、「生きがいをもって生きる子になってほしい」、生活習慣面の「自分で食べられるようになってほしい」の将来への期待項目が3つ、言語面の「ゆっくりでもいいからしっかりと発音ができるようになってほしい」、運動機能面の「ひとりでおすわりをしてほしい」、生活習慣面の「自分で衣服の着脱ができるようになってほしい」の能力への期待項目が3つ、情緒面の「喜怒哀楽をその子なりに表現できるようになってほしい」の人格への期待項目が1つなどの5項目があった。これらの項目は「幸せ」「生きがい」「食事自立」「喜びの日」「意思表現」「衣服の着脱」などを意味するものであった。

逆に特徴を示していない項目には、進学面の「特殊学級へ行かせたい」、運動機能面の「走れることができるようになってほしい」、生活習慣面の「家事の手伝いができるようになってほしい」などの項目であった。

以上の結果から、第1因子は人生の幸せと日常生活能力に関した因子であって「人生の幸せと身

辺生活能力の発達」を求める因子と名づけることができよう。そして重度の肢体不自由児に対する日本一母親群の発達期待は、主として人生の幸せと周辺生活能力の発達因子によって構成されているといえる。従ってこのことから、障害が重度な肢体不自由児に対して、主として人生の幸せと周辺生活能力の発達に関する期待をしていることがわかる。

IV. 総合的考察

肢体不自由児に対して韓国一母親群の発達期待について、III-2-(1)(3)、III-3-(1)(3)においてそれぞれ考察してきたが、ここで本研究における総合的な考察を行なう。

研究の結果明らかにされた韓国と日本の母親に見いだされた因子をまとめると Table 12の通りになる。

まず肢体不自由児の年齢の変化にともなう韓国母親の発達期待では、小学部の児童をもつ母親の発達期待は、周辺生活能力の発達に関する期待であった。また、高等部の生徒をもつ母親の発達期待は、人生の幸せと自立への能力発揮を望んでいる。これは Kogan ら (1974) 藤田 (1976) 中谷 (1979) 等の研究結果で指摘されるところと同様に、子どもの年齢の変化とともに能力だけに対する期待から性格面、価値的側面も含む全体的発達に対する期待へと変化している傾向を示しているといえよう。特に高等部で自立への強い期待を示していることは、母親として障害をもつ自分の子どもの将来への不安及び心配などが強く影響されていると考えられる。

一方、障害の程度による母親の発達期待には、障害が軽度な場合に職業的自立と特技・残存能力の発達を期待しており、障害が重度な場合には物事に耐えられる精神と積極性への強い精神力を期待している。障害が軽度の場合に特に職業的自立などの能力面に期待を示していることは、崔 (1980) の研究で精神薄弱児の職業観の調査において精神薄弱児の両親は将来のことで自分の死後子どもの生活面について非常に心配していることを指摘している点と同様な結果を示している。

これらのことから考えると、障害が軽度な肢体不自由児の母親は自分の子どもの将来への生活安定などに非常に心配を示していることがわかる。また、障害が重度な場合に物事に耐えられる精神

Table 4 第1因子についての因子列 (小学部, 韓国一母親群)

特徴を最もよく示している項目
(items most characteristic)

Score	(項 目) No.	項 目
+ 4	(2)	自分で洗顔ができるようになってほしい。
+ 4	(18)	ゆっくりでもいいからしっかりと発音ができるようになってほしい。
+ 4	(10)	はさみで丸や四角を切り抜けるようになってほしい。
+ 3	(3)	自分で衣服の着脱ができるようになってほしい。
+ 3	(1)	自分で食べられるようになってほしい。
+ 3	(31)	物事に対してねばり強く耐えられるようになってほしい。
+ 3	(51)	職業を持って自立してほしい。
+ 3	(30)	積極的にやろうとする意志をもつようになってほしい。

特徴を示していない項目
(items least characteristic)

Score	(項 目) No.	項 目
- 4	(50)	一般学校で高等教育を受けさせたい。
- 4	(43)	人見知りをしないでほしい。
- 4	(54)	特殊学級へ行かせたい。
- 3	(46)	集団でルールに従ってゲームができるようになってほしい。
- 3	(55)	普通学級へ行かせたい。
- 3	(15)	健康診断, 予防接種, 病気やけがの治療をいやがらずに受けるようになってほしい。
- 3	(39)	かわいそうだと思う心をもつ子どもになってほしい。
- 3	(22)	「野菜」「果物」「動物」の名前がわかるようになってほしい。

Table 5 第1因子についての因子列 (小学部, 日本一母親群)

特徴を最もよく示している項目
(items most characteristic)

Score	(項 目) No.	項 目
+ 4	(59)	幸せに生きてほしい。
+ 4	(23)	相手の言うことを理解できるようになってほしい。
+ 4	(1)	自分で食べられるようになってほしい。
+ 3	(20)	自分の欲しいものが言えるようになってほしい。
+ 3	(13)	けがをしたりからだの異常なときは訴えられるようになってほしい。
+ 3	(56)	喜びの日々を送ってほしい。
+ 3	(60)	いきがいを持って生きる子になってほしい。
+ 3	(45)	集団生活ができるようになってほしい。

特徴を示していない項目
(items least characteristic)

Score	(項 目) No	項 目
- 4	(50)	一般学校で高等教育を受けさせたい。
- 4	(54)	特殊学級へ行かせたい。
- 4	(55)	普通学級へ行かせたい。
- 3	(6)	自分で買い物ができるようになってほしい。
- 3	(25)	手紙が書けるようになってほしい。
- 3	(26)	日常生活にさしつかえない程度の計算ができるようになってほしい。
- 3	(51)	職業を持って自立してほしい。
- 3	(29)	めずらしい事について質問したり調べたりするようになってほしい。

Table 6 第1因子についての因子列 (高等部, 韓国一母親群)

特徴を最もよく示している項目
(items most characteristic)

Score	(項 目) No	項 目
+ 4	(59)	幸せに生きてほしい。
+ 4	(60)	いきがいを持って生きる子になってほしい。
+ 4	(18)	ゆっくりでもいいからしっかりと発音ができるようになってほしい。
+ 3	(57)	自分のもてる能力を発揮してほしい。
+ 3	(58)	何か一つでもよいから社会に役立つ子になってほしい。
+ 3	(30)	積極的にやろうとする意志をもつようになってほしい。
+ 3	(31)	物事に対してねばり強く耐えられるようになってほしい。
+ 3	(51)	職業を持って自立してほしい。

特徴を示していない項目
(items least characteristic)

Score	(項 目) No	項 目
- 4	(22)	「野菜」「果物」「動物」などの名前がわかるようになってほしい。
- 4	(43)	人見知りをしないでほしい。
- 4	(36)	喜怒哀楽をその子なりに表現できるようになってほしい。
- 3	(19)	学校での出来事を親に話せるようになってほしい。
- 3	(21)	「……を持ってらっしゃい」などの簡単な命令を理解して実行してほしい。
- 3	(27)	養護学校での授業を理解できるようになってほしい。
- 3	(29)	めずらしい事について質問したり調べたりするようになってほしい。
- 3	(13)	けがをしたり体の異常なときは訴えられるようになってほしい。

Table 7 第1因子についての因子列 (高等部, 日本一母親群)

特徴を最もよく示している項目
(items most characteristic)

Score	(項 目) No	項 目
+ 4	(59)	幸せに生きてほしい。
+ 4	(52)	職業の訓練をする施設で指導を受けさせたい。
+ 4	(60)	いきがいを持って生きる子になってほしい。
+ 3	(17)	自分で健康管理ができるようになってほしい。
+ 3	(53)	何か一つでもよいから特技を持っている子になってほしい。
+ 3	(57)	自分のもてる能力を発揮してほしい。
+ 3	(30)	積極的にやろうとする意志をもつようになってほしい。
+ 3	(31)	物事に対してねばり強く耐えられるようになってほしい。

特徴を示していない項目
(items least characteristic)

Score	(項 目) No	項 目
- 4	(18)	ゆっくりでもいいからしっかりと発音ができるようになってほしい。
- 4	(2)	自分で洗顔ができるようになってほしい。
- 4	(9)	ひとりで歩けるようになってほしい。
- 3	(24)	数字や文字が読めるようになってほしい。
- 3	(1)	自分で食べられるようになってほしい。
- 3	(3)	自分で衣服の着脱ができるようになってほしい。
- 3	(7)	ひとりでのおすわりをしてほしい。
- 3	(22)	「野菜」「果物」「動物」などの名前がわかるようになってほしい。

Table 8 第1因子についての因子列 (軽度, 韓国一母親群)

特徴を最もよく示している項目
(items most characteristic)

Score	(項 目) No	項 目
+ 4	(51)	職業を持って自立してほしい。
+ 4	(60)	いきがいを持って生きる子になってほしい。
+ 4	(58)	何か一つでもよいから社会に役立つ子になってほしい。
+ 3	(59)	幸せに生きてほしい。
+ 3	(53)	何か一つでもよいから社会に役立つ子になってほしい。
+ 3	(57)	自分のもてる能力を発揮してほしい。
+ 3	(47)	集団で自分の意志で行動できるようになってほしい。
+ 3	(31)	物事に対してねばり強く耐えられるようになってほしい。

特徴を示していない項目
(items least characteristic)

Score	(項 目) No.	項 目
- 4	(3)	自分で衣服の着脱ができるようになってほしい。
- 4	(7)	ひとりでおすわりをしてほしい。
- 4	(22)	「野菜」「果物」「動物」などの名前がわかるようになってほしい。
- 3	(2)	自分で洗顔ができるようになってほしい。
- 3	(54)	特殊学級へ行かせたい。
- 3	(1)	自分で食べられるようになってほしい。
- 3	(21)	「……を持ってらっしゃい」などの簡単な命令を理解して実行してほしい。
- 3	(13)	けがをしたり体の異常なときは訴えられるようになってほしい。

Table 9 第1因子についての因子列（軽度，日本一母親群）

特徴を最もよく示している項目
(items most characteristic)

Score	(項 目) No.	項 目
+ 4	(51)	職業を持って自立してほしい。
+ 4	(58)	何か一つでもよいから社会に役立つ子になってほしい。
+ 4	(31)	物事に対してねばり強く耐えられるようになってほしい。
+ 3	(50)	一般学校で高等教育を受けさせたい。
+ 3	(55)	普通学級へ行かせたい。
+ 3	(33)	人に頼らずに自分で物事を処理できるようになってほしい。
+ 3	(57)	自分のもてる能力を発揮してほしい。
+ 3	(16)	車に気をつけながら道路を歩けるようになってほしい。

特徴を示していない項目
(items least characteristic)

Score	(項 目) No.	項 目
- 4	(7)	ひとりでおすわりをしてほしい。
- 4	(21)	「……を持ってらっしゃい」などの簡単な命令を理解して実行してほしい。
- 4	(54)	特殊学級へ行かせたい。
- 3	(20)	自分の欲しいものが言えるようになってほしい。
- 3	(43)	人見知りをしないでほしい。
- 3	(44)	家族のみんなとほぼ適切に交流ができるようになってほしい。
- 3	(14)	安全に気をつけ遊具や道具を使えるようになってほしい。
- 3	(2)	自分で洗顔ができるようになってほしい。

Table 10 第1因子についての因子列 (重度, 韓国—母親群)

特徴を最もよく示している項目
(items most characteristic)

Score	(項 No	目)	項	目
+ 4	(31)		物事に対してねばり強く耐えられるようになってほしい。	
+ 4	(59)		幸せに生きてほしい。	
+ 4	(57)		自分のもてる能力を発揮してほしい。	
+ 3	(30)		積極的にやろうとする意志をもつようになってほしい。	
+ 3	(58)		何か一つでもよいから社会に役立つ子になってほしい。	
+ 3	(51)		職業を持って自立してほしい。	
+ 3	(60)		いきがいを持って生きる子になってほしい。	
+ 3	(53)		何か一つでもよいから特技を持っている子になってほしい。	

特徴を示していない項目
(items least characteristic)

Score	(項 No	目)	項	目
- 4	(22)		「野菜」「果物」「動物」などの名前がわかるようになってほしい。	
- 4	(43)		人見知りをしないでほしい。	
- 4	(8)		走れることができるようになってほしい。	
- 3	(36)		喜怒哀楽をその子なりに表現できるようになってほしい。	
- 3	(39)		かわいそうだと思う心をもつ子どもになってほしい。	
- 3	(27)		養護学校での授業を理解できるようになってほしい。	
- 3	(26)		日常生活にさしつかえない程度の計算ができるようになってほしい。	
- 3	(42)		兄弟と順番に物を使うようになってほしい。	

Table 11 第1因子についての因子列 (重度, 日本—母親群)

特徴を最もよく示している項目
(items most characteristic)

Score	(項 No	目)	項	目
+ 4	(59)		幸せに生きてほしい。	
+ 4	(1)		自分で食べられるようになってほしい。	
+ 4	(60)		いきがいを持って生きる子になってほしい。	
+ 3	(56)		喜びの日々を送ってほしい。	
+ 3	(18)		ゆっくりでもいいからしっかりと発音ができるようになってほしい。	
+ 3	(7)		ひとりでおすわりをしてほしい。	
+ 3	(36)		喜怒哀楽をその子なりに表現できるようになってほしい。	
+ 3	(3)		自分で衣服の着脱ができるようになってほしい。	

特徴を示していない項目
(items least characteristic)

Score	(項目) No.	項 目
- 4	(54)	特殊学級へ行かせたい。
- 4	(50)	一般学校で高等教育を受けさせたい。
- 4	(8)	走れることができるようになってほしい。
- 3	(5)	家事の手伝いができるようになってほしい。
- 3	(51)	職業を持って自立してほしい。
- 3	(25)	手紙が書けるようになってほしい。
- 3	(29)	めずらしい事について質問したり調べたりするようになってほしい。
- 3	(55)	普通学級へ行かせたい。

Table 12 韓国と日本の母親の発達期待因子

		韓 国	日 本
学 年	小学部	身辺生活能力の発達 の因子	人生の幸せの因子
	高等部	人生の幸せと自立 への能力発揮の因子	人生の幸せと自立 への能力発揮の因子
障 害	軽 度	職業的自立と特 技・残存能力発達 の因子	職業的自立と一般 学校での教育の因 子
	重 度	自立への強い精神 力の因子	人生の幸せと身辺 生活能力発達 の因子

と積極性などの精神面を期待している点は、韓国社会の価値意識が強く作用されているかもしれない。これは具体的な子どもの能力面での十分な理解より、抽象的理解から成り立った考え方もかもしれない。もし具体的理解より抽象的理解から成り立った考え方とすれば、障害が重度な子どもに対する障害の理解あるいは子どもの指導方法などについて具体的知識が必要と思われる。

次に肢体不自由児に対する韓国と日本の母親の発達期待の相違については、小学部において日本側が人生の幸せを期待しているのに比べて韓国側は身辺生活能力の発達を期待している。障害が軽度な場合には日本側が一般学校での教育を期待しており、韓国側は特技・残存能力の発達を期待している。また障害が重度な場合には日本側が人生の幸せと身辺生活能力の発達を期待しており、韓国側は自立への強い精神力を期待している。

これらのことから韓日両国を比較すると、全体

的傾向として日本側では価値的側面が期待されており、韓国側では能力面が期待されているといえる。この結果については三沢・中司(1983)の研究で指摘しているように、現在日本では政治、経済、社会、文化すべてで様々な価値観が主張され対立していることから、それが本研究の結果にも影響を与えていると考えられる。また、日本側に一般学校での教育への期待が見られていることに関しては、日本における統合教育への強い関心が影響していると考えられる。

以上のことから本研究では肢体不自由児に対する韓国側の母親の発達期待が明らかにされたが、今後は発達期待をもっと広点からとらえるために、肢体不自由教育に携わっている教師および一般人がどのような発達期待を持っているのかを明らかにし、もし発達期待に問題があれば、それを正しい方向に是正することが必要であろう。

文 献

- 参考文献 1) 東洋・柏木・R. D. Hess. (1981): 母親の態度・行動と子どもの知的発達. 一日米比較研究—東京大学出版会.
- 2) 藤田雅子(1976): 幼児精神薄弱児をもつ母親の養育的期待. 淑徳大学研究紀要 No. 9. 10併号, 96—114.
- 3) 井上健治(1979): 新入学児童に対する期待形成の要因. 東京大学教育学部紀要第19巻, 15—26.
- 4) Jensen, G. D. and Kogan, K. L. (1962): parental estimates of the future achievement of children with cerebral

- palsy. J. Ment. Defic. Resear. 6, 56—64.
- 5) Kogan, K. L. Tyler, N. (1974): The process of interpersonal adaptation between mothers and their cerebral palsied children. *Develop. Med. child. Neur.*, 16, 518—527.
- 6) 中谷慶子 (1978): 重度心身障害児をもつ母親の発達期待に関する研究. 筑波大学大学院教育研究科修士論文.
- 7) 三沢義一・中司利一・川間健之介 (1984): 日本, 韓国, 及び台湾における障害児・者に対する態度に関する比較文化的研究. 心身障害学研究 8 巻第 1 号, 81—101.
- 8) 三宅一郎・山本嘉一郎 (1982): SPSS 統計パッケージ II 解析編. 東洋経済.
- 9) 清水利・斉藤耕二 (1976): 因子分析法. 日本文化科学社.
- 10) 崔中玉 (1980): 精神薄弱児に対する理解と態度研究. 韓国社会事業大学院博士学位論文.

Summary

A Study on Developmental Expectations of Mothers with Crippled Children in Korea

Hwa Moon, Park Toshikazu Nakatsukasa

In order to study the developmental expectations for crippled children, the Q—technique was used in 24 Korean and 23 Japanese.

Q—cards containing 60 developmental expectations of the children were given to the subjects and the subjects had to sort the cards on nine—rank normal distribution scale.

The results were as follows:

1) Developmental expectation of mothers in Japan for the elementary school aged child were concerning "happiness".

Expectations of mothers in Korea were concerning "development of selfhelp".

2) Developmental expectation of mothers in Japan for the senior high school aged child were concerning "happiness and development of self independence".

3) Developmental expectation of mothers in Japan for the child with mild handicap were concerning "vocational independence and education in ordinary high school".

Expectations of mothers in Korea were concerning "vocational independence and development of specialities, remaining abilities".

4) Developmental expectation of mothers in Japan for the child with severe handicap were concerning "happiness and development of selfhelp".

Expectations of mothers in Korea were concerning "The strong power of mentality to overcome handicap".

Key word: crippled children, developmental expectation, Q—technique, QFACTOR